

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2018.3.4
VOL. 73

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

感 覚

笠井和明

ここ数年、なかった冬である。

暖冬が当たり前の数年を過ごしてしまうと、それが当たり前のように思えて来て、かつて、あれほど考え抜かれて来た、防備も、緊張感も、肌感覚も衰えていく。

冬の怖さ、冬に路上で暮らさざるを得ないことを改めて、思う。20数年前、物資、そして、医療的なケアが不足していた頃、比較的暖かな新宿の地下道でも、冬場、仲間が次々に亡くなっていた。「起きてこないで、開けてみたら、冷たくなっていた。」立ち会いの警官に同じ言葉を何度、伝えただろうか。

それから、冬は恐怖であった。冬に大きな出来事が起った。東京都による組織的な撤去作業が始まったのが、2月17日。それに抗い、大騒動になったのが1月24日。4名もの仲間の命を奪った西口の地下広場の火災が2月7日。11年前、中央公園と都庁周辺を大きく巻き込んだ東京マラソンが始まったのも2月の冷たい雨の日だった。



まあ、こう書くと、単なるメモリアルであるが、当事者からすると、その時々、そんなものではなく、その出来事の前と云うのは、今思えば想像を絶する日々で、仲間の生活を守ること、命を守ること、この問題の未来をこじ開けることを、すべて同時に、かつ前例がないので、独学で、とにかく前に進もうと、やり抜いたと云うか、野垂れ回ったと言おうか、そんな、濃密な時間の過程でもあった。

そして、私たちの肌感覚は、そこで、作られて行った。けれど、その感覚は誰かに引き継がれることもなく、また、制度に反映されることもなく、当時を知る人も現場から少なくなり、無くなりつつあった。

そこへ、これである。

状況の変化を、あまりにも表層で、捉え過ぎていた。

生活保護制度や自立支援施策を路上脱却の手段と美化し過ぎ、そこに収斂されない人々を我々の側でさえ忌避し、ニーズがない限り、過剰な接触を拒んで来た。「福祉を受けずに、路上にいる、変なおじさん達」と、そんなイメージを、学者や世間が無意識に作ろうとしているが、こちらも意識せずに、そんな流れに乗っていたのかも知れない。

「去るも地獄残るも地獄」の心理状態の人に、安易な制度論を言ったとしても、それは何も伝わらない。「福祉を取ろうよ」とプラカード掲げて歌を歌ってみても、雄弁に生活保護制度を語ってみても、当事者との意識の乖離は絶望的である。

理屈で他者を支配しようとする人々が、この世に



は一定数居る。「理が勝る」とそれらの人々は考えるのであるが、「理」で人々は生きてなど居ない。下層に向かう視点が、この「能書き垂れ」程度であれば、距離はどんどん開く。「語った言葉が通じ

ていない」と、感じることはないだろうか？感じることに出来なければ、それはスピーカー音にしかならないし、その人にとって、うっとおしいだけである。感じたならば、伝え方を変えていかなければならない。そのため、どんなに面倒でも、そのための努力をしていかなければならない。他人のせいにしたならば、そこで終わってしまう。

状況は変わっている面と、変わらない面が同居している。

良く「困難ケースが路上では多い」と言う。いやいや、そんなケースは昔からあったのであるが、全体数が多かっただけに、そこに紛れていただけで、急に出て来たわけでもない。簡単なケース（ニーズが単純な）ところから自立支援策を始めた都合上、困難なケースは後回しになっただけで、明らかに変わったのは全体の数だけであろう。

数の減少は新宿では著しい。具体的な数字は、今号のパトロール班の報告を見てもらえば良いが、「いつもより寒い」以外は昨年と同じような状況であるのに、目に見えて数は減っている。見る限りにおいて、新規流入層が少なかったし、見えにくかった。

全国的に見て、失業層の排出が、景気の持ち直しで少なくなったのか、全国の自治体が「生活困窮者自立支援法」の実施に取り組んでいることもあり、失業層が排出されても、地域、地域で「寸止め」される状況となったのか？それならそれで、東京に取ってみれば、路上生活者が新規であまり増えない構造はとても良い傾向なのであるが、東京都福祉保健

局が、「住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査」を、年明けにタイミング良く発表をしてくれ、ホームレス予備軍（インターネットカフェ等をオールナイト利用する＝住居喪失者）は都内で約4,000人も居ることが分かったと発表した。平成19年の厚生労働省の実態調査で、住居喪失者は全国で5,400人、23区で2,000人と発表されているので、これらの推計値がフェイクでないとするならば、この10年、東京では路上生活者は減ったが、他方でホームレス予備軍が倍増したと推論される（そう云う都合の悪いことは都は言わないが）。

この報告書を読んでもみると、今期の路上人口減は、あまりにも寒いので、（小金を持っている者は）オールナイトを避難場所として利用したが故に減ったとも考えられる。

新規流入層はこの冬、路上にあまり出でおらず、寒い時期はオールナイトに身を隠し、暖かくなったら、お金も尽きるだろうし、年度替わりで仕事も尽きれば、路上に出て来てと、そう云う構造なのだろう。

景気の好況時、かつて山谷など簡易旅館（ドヤ）で暮らす日雇労働者が、仕事がなくなり野宿予備軍になって行ったのと同様、今は、都内各所のオールナイト利用者が、新たなホームレス予備軍になっている。そう見るべきか、それとも、いやいや今の若者は野宿なんて出来ないよ、そこに大きなニーズは見えないよ、適当な施策を続けておけば良いと高を括るのか、判断は分かれるだろう。

東京オリンピック後の不況を考えると、この潜在値はとても、脅威でもある。

他方、変わらないのは、今も路上に人が暮らしている現実である。そして、そこには色々な面があり、正社員の仕事があれば、アパート型の住居があれば、社会復帰は可能と、多くの人々がかつて語り、実践して来た理屈は、今はあまり通用しない状況ともなっている。経過と共に、かつて新鮮であった施策も、やがて古めかしくなり、魅力もまたなくなる。そのご当人も年を重ねる。必要がなければ行かなければ良いじゃないか、今のまま生活していれば良いじゃないかと、福祉（相談）の側は見るようになり、そして、現状は固定化する。福祉が排除をしないと云うことは、積極的な保護や支援はしないと同義であり、管理者の諸問題にはよほどのことでなければ手を貸さず、問題解決のため現場にも行かず、窓口で、

ただただ、ひたすら、お待ちしております。

この冬、路上でも多く生命が消えて行った。そこを死に場所としたのか、それとも否か、分からないことが多い。新宿だけでなく、各所でも亡くなっている。それを知らせてくれるだけでもありがたい。たった一人で死んだのなら、誰もそれを、誰かに伝えられないし、供養もできない。私たちでさえ、亡くなったことを知らないケースの方が多い。都が調査している路上生活者の概数の変動は、ただ、自然減が反映されているだけなのではないかとさえ、思っている。これだけ、寒い冬や、暑い夏が来れば、気候が人口問題に影響を及ぼすかも知れない。路上はその先駆であるのかも知れない。

雪が降ると、今日は何人死んだのだろかと、思いを馳せる。何年この活動をやろうとも、それを、決して止められない、もどかしさを感じながら。この、一時忘れていた肌感覚は、懐かしくもあり、恐ろしくもある。しかし、それでも真冬の中で、人々は暮らさざるを得ない。せめて、少しでも暖かく、と話しかけ、おにぎりや携帯カイロを渡す。そうやって、新宿の冬は過ぎていき、生き延びれたら、これ幸いなり。

その路上の人々が、本人にとって、今より、より良い生き方が出来るような支援は、手法も含め、まだまだあると思うのである。

連絡会、そしてNPO新宿の中で、キーパーソンの役を演じていた二人の元当事者も、この1月、相次いで亡くなった。

一人は緊急一時保護センター板橋寮（今はもうない）在寮中に知り合い、自立支援センター渋谷寮（これももうない）から、NPOに就職したK氏（享年60）、そして、もう一人は、そのK氏が「地域生活移行支援事業」の就労支援を担当していた時、戸山公園で知り合い、事業参加者を経て、NPOに職を得たT氏（享年57）。

二人とも、対策事業の歴史のど真ん中に位置しながら、それぞれの当事者性を持ち、仲間と関わり、そして、駆け抜けて行った。感謝であり、お疲れさまである。願わくば、もう少し長生きをし、10年後の東京も見渡してもらいたかった。苦勞した甲斐があったからこそ、みんな、路上から出ることが出

来たのだと、若い連中に、誇らしげに語ってもらいたかった。

福祉だけではない生き方を共に歩んだ同志でもある。そんな仲間は、本当に、次から次へと鬼籍に入る。連絡会は、あの世の方が、騒がしいことであろう。

新しい「麦の家」（支援付共同住宅）は、年末にお披露目したが、年末年始は利用者はなく、1月からばちばち、入居が開始された。

そんな折り、札幌の宿泊施設で火災、11名も亡くなる大惨事があり、規制強化に乗り出そうとした厚生労働省は「渡りに船」。怪しげなNPOは、皆「貧困ビジネス」、無届け施設は皆、危険と、徹底した規制強化に舵を切りそうである。

「貧困ビジネス」を開発し、民営化の波の中で、おおいに利用して来た東京都は、これらの動きにどう対抗していけるのか。

東京の厚生施設といえ、宿泊所といえ、高度経済成長期に作られた公的施設群は、軒並み古く、まるで刑務所のようなものであるが、国が民間が危険と言うのであれば、それらを全部建て替え、自前で、もしくは天下り団体に「スプリングラー付きの貧困ビジネス」を再構築してやれば良いだけであるが、そんなところでは再起のための良き施設にはならないだろう。どうなることやらである。

そんな時に船出をした新しい「麦の家」であるが、狭かろうが、何だろうが、新築はやはり良い。そして、回りの環境も、新宿の中心とは違い、とても静かで、人間らしい暮らしが、割と簡単に出来そうな場所でもある。

みんなが住みたがるような建物を創ろうと始まったプロジェクト。たった6名の住処なれど、そこから、その地域へと発展していけそうな感はある。そしたら、みんなが住みたがるような地域が創れるかも知れない。

越後の「いろりん村」同様、「夢」であるが、地につき、「夢」を描けるのが、民間の良さ。

路上からつないで、つないで、分散させるのではなく、収容させるでもなく、新しい人と社会との関係を、都会でも、そして地方でも造り出す。そうすれば良いと思う。（了）

医療班の越年期の活動は、2014年から連絡会の「おにぎりパトロール」に同行する訪問健康相談活動を行っている。野宿者の生活場所に訪問し、健康状態を聞き取り、血圧計測・市販薬提供を行った。12月31日はパトロールを行わず、中央公園で年越しイベントが開催されたため、医療班もイベント会場で机出し健康相談を行った。

活動期間：2017年12月29日から2018年1月3日まで6日間

活動場所：新宿中央公園・西新宿・新宿駅周辺（12月29日-1月3日、除12月31日）

東口ルート：中央公園・甲州街道・新宿駅南口・東口・西武新宿駅

西口ルート：都庁下・西新宿・新宿駅西口

活動内容：パトロールに同行し訪問健康相談：夕方 東口ルート・西口ルート(17:00-20:00)

深夜 西口地下ロータリー (22:30-23:30)

年越しイベント開催中机出し健康相談（12/31中央公園水の広場、18:00-23:00）

医療班参加ボランティア 31名（延べ40）：医師13、歯科医師2、看護職7、薬剤師3、一般5

	東口ルート	西口ルート	深夜パト	年越し	合計（延べ数）
野宿総人数（平均）：	35	64	75	70	938
医療班対応者数（平均）：	15	15	19	31	273
血圧（合計）：	16	39	8	2	65
診察（合計）：	0	0	1	0	1
紹介状（合計）：	0	0	1	0	1
薬（合計）：	61	52	83	30	226

提供薬（延べ数226）：風邪薬142、鎮痛薬18、胃腸薬58、湿布27、軟膏13、マスク63、絆創膏15

結果は1月2日に1名入院、休み明け1名受診でした。12月の定期パトでは10日・24日に新宿駅周辺で野宿している方が120～130名おり、医療班の対応者も80名程度でしたが、定期パトと同じ時間の集計では越年期間を通して野宿者90～100名、対応者平均30名と少なくなっていました。新宿区では越年臨時宿泊など特別な対応を行っていないので、野宿者数が減った理由は不明です。一説には暮れや正月くらいはカプセルホテルやネットカフェで過ごす人がいるとのこと。実際越年期間後1月14日の定期パトでは野宿者140名、医療班対応者98名でした。昨年まではこのような傾向はなかったのですが、仕事が増えて、ある程度蓄えがあったのかもしれません。

入院された方は12月29日から私たちがフォローしていた女性で肩・下肢痛を訴え歩行困難の方でした。医療への不信が強くすぐに受診は希望しませんでした。詳しい診察はできず毎回パトロール時声かけをしていましたが、衰弱が強くなり1月2日に搬送入院されました。極度の貧血と肺炎が認められたとの事です。スーパの会の方が救急要請・添乗されました。感謝致します。

休み明け受診の方は、連絡会ボランティアの方で足の蜂窩織炎の疑いで自分で受診されるとの事でした。

他に福祉につなぐ状況の方はおらず、1月4日の福祉行動は中止しました。

新宿連絡会医療班 大脇甲哉

2017/11/5

今年もまた、稲刈りを終えて気がつけば辺りの山は秋色。いろりん村は見事な紅葉の中に沈んでいる。稲がなくなった棚田はがらんとして、一気に寂しくなった。ついこの前まで田を埋め尽くしていた稲たちもまた「命」たちだったのだと感じる。でも寂しいだけじゃない。彼らはしっかりと種という形で子孫を残している。その命はまっとうされて次世代へと繋がれる。僕らはそんな命をありがたく頂き、僕らの命もまた繋がれるってわけだ。考えてみれば肉でも魚でも野菜でも、食べ物は全てが命だよね。空腹を抱えてゲットした一個のお握りがありがたいのはこの命を受けとったからじゃないか。そして、この命（＝食べ物）のありがたさを一番感じてくれるのは路上で不安定な食生活をする人たちじゃないかと僕は思う。越後の山村の米百姓の僕としては、そんな人たちに食料を届けられたらとても嬉しいんだ。

いろりん村では来年から食糧生産＝農業に取り組むつもり。とは言っても無理はしない。慌てることもない。楽しみながらやるのが一番。まずは田んぼや畑を眺めてみたい、あるいはちょっと土に触れてみたい、で構わない。もしかしたらそこで「命」みたいなものを感じられるかも知れないからさ。

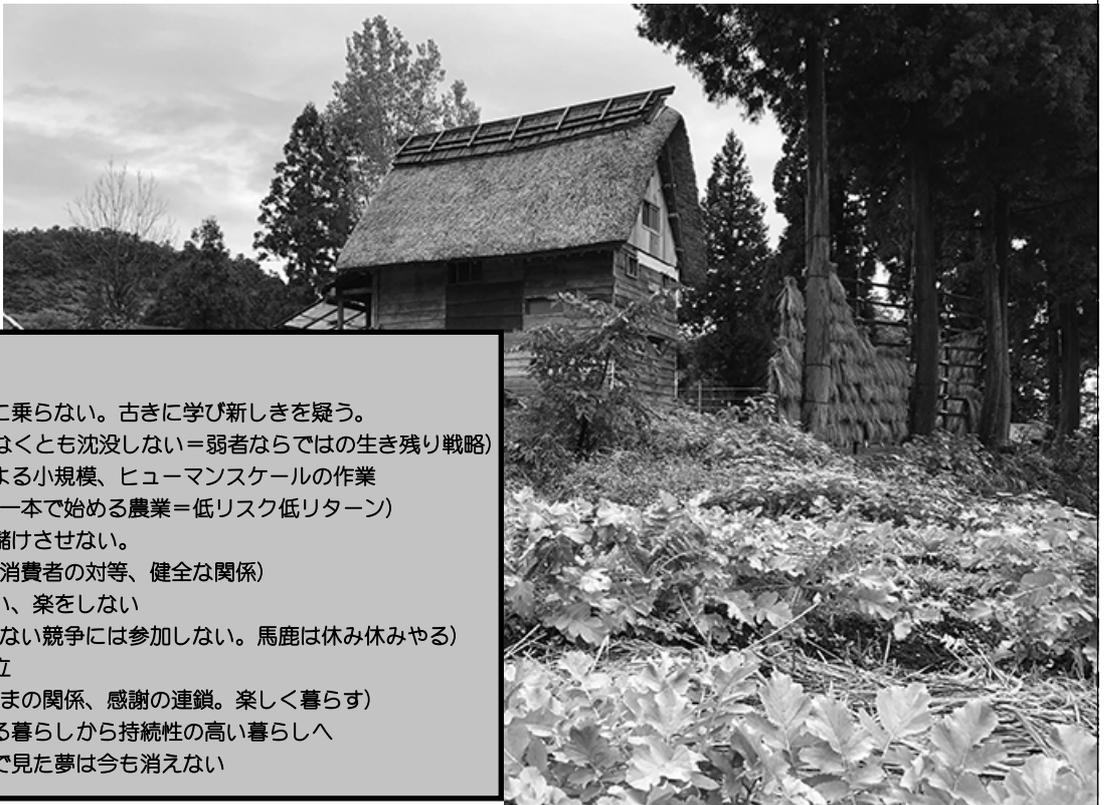


2018/2/4

御無沙汰です。寒い冬ですね。東京でも-4度とかのニュースを聴いていると、野宿の人には冗談抜きで凍死せぬよう気をつけて欲しいと願うばかりだ。

越後の山中にあるいろりん村はすっかり雪。現在の積雪は約3㍍。雪国を知らない人にはウソのようだろうけどホントの話。そんなところで一体どうやって暮らしてるんだ？ってよく聞かれるけど、備え有れば憂いなしのたとえのとおり、毎年のことだからそうは困らない。地域の除雪体制は行き届いていて、公道は大型の除雪車がやって来るからバッチリだ。でも積雪が4㍍近くなると家はすっぽりと雪に埋もれてしまう。そうなったら家を掘り出すしかない。だからこのあたりでは「雪かき」ではなく「雪掘り」と言うんだそう。昔はもちろん人力作業だったけど今では部落に共有の投雪機があるからそう大変でもない。

昨年に完成となったいろりん村の宿泊棟の雪掘りに先日、勇気ある三名が来てくれた。二名はそれなりに楽しんでようだけど、一名は「二度と冬は来たくない」と言っていた。それでも「雪景色は本当にきれいだね」とも言ってくれた。そう、家も田んぼも森も山も一面を真っ白に埋め尽くした雪景色はいいもんだ。それにさ、春の来なかった冬なんて今まで一度もないんだ。春は必ずやってくる。いろりん村にも、新宿の路上にも。また今年も会いましょう。



いろりん村 七か条

- 1 時代の流れに乗らない。古きに学び新しきを疑う。
(浮かぶ瀬はなくとも沈めない＝弱者ならではの生き残り戦略)
- 2 人力中心による小規模、ヒューマンスケールの作業
(小資本、鍬一本で始める農業＝低リスク低リターン)
- 3 儲けない、儲けさせない。
(生産者と消費者の対等、健全な関係)
- 4 無理をしない、楽をしない
(終わりのない競争には参加しない。馬鹿は休み休みやる)
- 5 自立より共立
(お互いさまの関係、感謝の連鎖。楽しく暮らす)
- 6 成長を求める暮らしから持続性の高い暮らしへ
- 7 段ボール村で見た夢は今も消えない

越年のパトロールを12/29~1/3の5日間で行った。おにぎり、カイロ、毛布を持ち、新宿と近隣を回った。昨季の例にならい、医療班が中心を担った。

全体に静かな展開だった。救急搬送が1、一時保護や年明け福祉対応は実質的にゼロ。接する人数は駅周辺の地上・地下で2割減。通年の傾向に、期間特有の条件が加わったとみられる。

越年後に苦境が待っていた。強い寒さと雪に見舞われた。人的には2件、明暗が分かれた。一つは前夜、不調のうかがわれた者を翌朝に訪ねた。すぐ危険と察した。救急要請し、何とか間に合った。

もう一人は亡くなった。期間中にSOSを発していた。体調は必ずしも悪く思えなかった。3度、面談の機会を想定した。うち一回を用いたが会えず、他は試さなかった。こちらの落度で、故人には謝りようがない。

3季続け、時期をずらし困難が起きている。「越年」枠の妥当さを揺るがす。死亡については4季前を含め、3件が支援側の不手際にかかわる。昔も似たことはあったろう。取り組みの規模が小さくなり、表面化しやすくなった。

失敗の形は共通する。手がかりを精査せず、状況を楽観する。今回は本人の「話したい」の意向を軽視した。特に心身とも「つらさ」をにおわせる弁は、額面通り受け取るべきだった。

「いざとなれば救急車」の念もあった。医療は重

要なきっかけだが、不作為の口実になる。そして遅れた時の代償が大きい。

一人の過誤が致命的なのは、組織の問題といえる。このところ、相談を受ける態勢がやや弱まっている。複数による協議・検討、役所や病院への同行と対にした応接。少なくとも、これらは必要だろう。各要員が意識し、独立して行えるのが望ましい。

路上には介入しづらい相手がいる。支援者はずい「面倒くさい」や「勝手にしろ」と距離を置く。放置の末の最期は、緩慢な自死を思わせる。なるべく、その助けはしたくない。本人任せには限界がある。

人と交わる以上、平穏だけではすまない。ある意味、死はつきもの。多少の慣れや薄情が鍛えられる。しかし、割り切れなさが残るのも確か。

現場の違いを超え、関連の言葉がみつかる。例えば、山谷のホスピス関係者の葛藤。「死ぬのはしょうがない、誰だって死ぬ。だけど、何か処置をすれば、あと一日で死ぬのが、三日もつかもしいれない」(中村智志『大いなる看取り』)。

また「死者の行列を見送った」というケースワーカーは、狭間で「命を慈しめ」(須藤八千代『ソーシャルワークの作業場』)の声を聞き取る。

メント・モリ、死を想え。気の重い結果を引きずりながら、新宿の街を歩きます。

越年パトロール記録

コース		時間	日付					平均	昨季平均
			12/29	30	1/1	2	3		
都庁 周辺	南	17:00~	30	39	32	33	29	41	45
	北		9	9	10	9	6		
新宿 駅	東	18:00~	27	21	21	25	32	56	71
	西		35	32	28	35	27		
地下広場		22:30~	80	63	77	79	76	75	94
延べ計			181	164	168	181	170	172	210

越年概数調査

	今季	昨季
地下広場	80	111
都庁周辺	47	65
駅東口	8	5
西口	32	32
南口	10	4
新宿御苑	7	9
高田馬場	21	26
神宮外苑	12	10
江戸川橋	19	23
紅葉山	4	1
曙橋	2	7
計	242	293

越年期間中、概数調査を行った。終電後1:30より、各所で寝泊まりする人数を調べた。合計の昨季比は2割減、早い時間帯(17:00-23:00)の縮小率と一致する。

地点別で特徴的なのは地下広場。かつては深夜帯で倍近く増えたりした。今回は宵の口とほぼ同数。ここの分布はまず古参が場所を占め、遅れて新参が混じる。最近、そもそも新規層が少ない。全般に減員し、あえて待たずに隙間が探せる。

少し前まで、時間帯による顔ぶれの異同が課題の一つだった。夜更けしか会えない相手とどう向き合うか。そうした状況が、変わりつつあるかもしれない。

路上の移ろいは早い。「…野宿者問題は5年も経つと風景ががらりと変わり、10年経つとほとんど別の問題になっている…」(生田武志『<野宿者襲撃>論』)。

実感ではさらに短く、たぶん3年周期くらい。要因として(当事者)運動、(行政)事業、法律、予算など。この辺りは説明するのに、つじつまを合わせやすい。よくわからないのが仕事や景気の面。独自の力学が働くように思う。

いずれにせよ、〈自立支援法〉から15年、〈年越し派遣村〉から10年。変わるには十分な時間がたった。

おにぎり作りと衣食住

新宿連絡会 関ビル越年本部

長年付き合わせて頂いている信州の山谷農場や千曲市の農家の方々を始め、全国から頂いたお米を炊いて、手作りのおにぎりを作り、それを路上の方々に定期的に提供しています。

年間通し、毎週日曜日は欠かさずこのボランティア活動を行い、また、年末年始の時期は大晦日を除いて、29日から3日まで連日のボランティア活動を行いました。

そうでなくとも人が集まらないところを、連日となると、人の確保からして大変でしたが、何とか少ないなりに、毎回、350から400個近いおにぎりを作り切りました。

また、おにぎり作りを行なっている関ビルの駐車場には衣類配布用の仮設テントを作りました。年末年始だけの「無料ブティック」。必要な衣類やら毛布やらを提供しました。

通常の関ビルシェルターは満床なので、年末年始

は、急病人シェルターを臨時に設置しましたが、こちらは開店休業で、スタッフが寝泊まりする場所となりました。

おにぎり作りのボランティア毎週日曜日にやっていますので、どうぞ、新宿にお寄りの時には、気軽にお越し下さい。



餅つき大会と年越し祭り

新宿連絡会 文化班

本越年では、昨年と同様、2回のイベントを行なった。1回目は12/29日、高田馬場関ビル前駐車場を借りての「もちつき大会」、2回目は12/31日、新宿中央公園「水の広場」での「年越し祭り」。

集まった仲間の数では、今期、初めての逆転現象と相成った。関ビル前が約100名。中央公園は約70名。昼と夜の気温の差か、それとも、中央公園を中心としてきた越年の記憶の薄れか、まあ、どちらにせよ、寒い中、わざわざ集まってくれた仲間と、久しぶりに集い、楽しんだ二日間でした。

もちつき大会は、恒例となりますが、関ビルオーナーでもある関昌也先生（元拓殖大教授）の「健康法についてのお話」。長生きの秘訣を日本人の思想的な面からも展開して頂きました。そして、長野の山谷農場から頂いたモチ米を使った、もちつき。若い仲間が率先してつき手にまわり、集まった全員分のもちが配られます。馬場ハウス調理室から、「ぜんざい」「焼きそば」も提供してもらい、お酒を飲みながら、「今年一年、よく生きて来れたな」と、

談笑しきり。

大晦日は新宿中央公園。例年より極端に寒い中、こちら恒例となった「五十嵐正史とソウルブラザーズ」の演奏と、「ディープユニットひびき」ダンスショーを、もつ煮込み炊き出しの後、毛布にくるまりながら鑑賞し、寒いのでお酒もぐんぐん入り、酒好きの仲間は大盛り上がり。紅白見ながら、年越しそば。

そうこうしている内に、「さすらい姉妹」ご一行が到着。路上劇が始まり、そっち行ったり、そば食ったり、紅白見たり、毛布にくるまったり。

かつての越年を知っている人たちから見れば、規模は小さくなり、寂しい思いがあるようだが、あまりに人が多いと、主催者側は、それはそれで大変なのである。これくらいの規模が、ある意味丁度良い。一緒に毛布にくるまって、でっかな都庁を見上げながら、仲間と共に新しい年を迎えました。



新宿連絡会 会計報告

2017年度 11月～2月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	63,520
1 寄付金収入	1,350,100	事務用品費	8,221
計上収入合計	1,350,100	事務所費分担金	210,000
II 計上支出の部		衛生管理費	4,071
1 事業費		支払手数料	12,324
弁当おにぎり事業	162,301	車両費	79,029
越年越冬事業	561,452	修繕費	6,500
その他活動事業	31,165	計上支出合計	1,211,839
2 管理費		計上収支差額	138,261
旅費交通費	3,842	前期収支差額	△11,138
通信費	69,414	次期繰越金	127,123

●活動カンパ

振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。